
自作ダンガンロンパ小説

WIND

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自作ダンガンロンパ小説

【Nコード】

N0961T

【作者名】

WIND

【あらすじ】

超高校級の高校生達がやってくるといって“希望ヶ峰学園”そんな超エリート級の学校に『超高校級の強運』として入学して来た一人の少年^{シンドウ}神堂^{ハルキ}春樹。

そんな学校で繰り広げられるコロシアイ、ウラギリ、ニクシミ、そしてゼツボウ……。

果たして希望を手に入れる事は出来るのか!?

一応、オリジナルストーリーの予定です……。

プロローグ（前書き）

超高校級にド素人で超高校級に文才能力がない自分がオリキャラで
書いちゃいます！

超亀更新で内容もあれになるかもしれないが暖かく見守ってください。
さい。

プロローグ

街のど真ん中に建っている一つの建物。“私立 希望ヶ峰学園”
各分野においてトップクラスである高校生達が集い、ここで卒業すれば人生で成功したも同然とまで言われている政府公認のエリート養成学校。

とにかく、各界に有望な人材を送り続けている伝説の学園・・・らしい。

国の将来を担う“希望”を育て上げることを目的とした、“希望の学園”と呼ぶにふさわしい場所。

そんな学園への入学資格は二つ・・・

「現役の高校生であること」

「各分野において超一流であること」

学園側にスカウトされた生徒のみが入学を許可される。

まあとにかく、そんなスゲエ学園の校門の前にオレは立っていた。

3

まずは、オーソドックスに自己紹介から始めようと思つ。

オレの名前は「神堂春樹」だ。

とにかくこれと言った特徴が何にもない、ごくごく普通な高校生である。いや、マジで。

強いて言えば、少し前向きで人一倍負けず嫌いなことだろう。

で、何でお前みたいなやつがそんな所にいるのかって？

そりゃ此処に入学するからに決まってるだろう。

じゃあなぜ入学出来るのかだって？うん、いい質問だ。

それは・・・、オレが抽選によって選ばれて入学することになった

からだ。つまり、全くの運。

「つまり、そんな方法で入学OKなんて大丈夫か？希望ヶ峰学園……と、そんな訳でオレは『超高校級の強運』として選ばれたたのである。」

まあ、理由はどうあれこの学園に入学できるんだ。ありがたく思う。」

しかし同時に少しだけ不安も出てきた。

神堂春樹

「にしても……こんなところでうまくやっていけるのか？」

そう思ってしまうのも無理がない。

オレ以外で希望ヶ峰学園に選ばれる生徒たちは超一流であり、知名度も半端ない。

入学するにあたって一緒に学園生活を共にするであろう仲間たちをネットなどで下調べしておいたのだが……

やっぱりどれも大きく飛びぬけた“超高校級”の面子ばかりであった。

まるでライオンに囲まれる小動物のよう……不安だ。

しかし少しだけ引っかかる事があった。

いくら検索しても、情報がヒットしない新生者が何人かいるらしい。つまり、オレと同じように実績のない人がほかにもいるということだ。

そう思うと少し安心する。

ハハハハ、我ながら情けない……。

そういうことで、オレは今、その学園の前に立っている。

神堂春樹

「よし……、んじゃ行くとしますか!」

そしてオレは希望ヶ峰学園への第一歩を踏み出した。

……と、同時に。

神堂春樹

「………~~~~~!!!???」

突如、視界が歪みだした。

ぐるぐるぐるぐるとまわりだし、飴細工のように混ぜり合って……

次の瞬間には……

5

暗闇。

それが始まり……

そして、日常の終わり……

この時オレは気づくべきだったんだ……。
オレは『超高校級の強運』なんかじゃなく……

『超高校級の悪運』だったって事を……。

ウガクエン

くよつこそ
ゼツボ

プロローグ（後書き）

初執筆、緊張しました！

超高校級の強運てのは無理ありましたかね？

よつこそせツボウガクエン その1 (前書き)

2話目です。張り切って書きます!!

ようこそゼツボウガクエン その1

神堂春樹

「……………うん……………」

オレが目を覚ますとそこは教室のような場所であった。

神堂春樹

「ふあ〜っ……………寝ちまつてたのか？」

にしても体がやけにダルい。そしてオレが寝ていたであろう机にはヨダレの跡がついていた。

神堂春樹

「げっ、後で拭いところ……………って、ん？」

ふと気が付くと、その机の上に一枚の置き手紙があった。

「『希望ヶ峰学園へようこそ。ここがオマエラが新しく生活する世界となります。心機一転頑張っていきましょう！』」

……………どっちかって言つと子供が描いたような絵をした学園のパンフレットだった。

いったい何の悪ふざけだろう。

ふと、教室にあつた掛け時計を見てみるとすでに9時を過ぎていた。オレがこの学園に来たのは7時30分。もう1時間半以上も寝ていたことになる。

神堂春樹

「やっべー！集合時間とっくに過ぎてるじゃねーか！」

入学式とか大丈夫かよ・・・まあ、色々説明がつくだろうしなんとかなるだろ。

オレは教室を出ようと急いで席を立った。と、その時オレは教室の妙な違和感に気が付いた。

・・・何で、窓の所にこんな鉄板が打ち付けられてるんだ？金具でガツチリと固定されてるし・・・。それに、あれは監視用カメラ？

そんなもんが何でこんな教室にあるんだ？

神堂春樹

「くそ・・・、何だつてんだよ・・・！」

オレは不安を抱えながら今いる教室を後にした。

さっきまでオレがあそこに居たのは、ロビーで倒れていたところを誰かが希望ヶ峰学園の教室まで運んでいってくれたんだろう。多分。

それにしても、さっきの教室といいこの廊下も・・・
異様だ・・・とてつもなく異様だ。

廊下にある窓にも鉄板が打ち付けられている。

まるで牢獄にいるかのような圧迫感・・・。

意味不明で理解不能だ……。

神堂春樹

「とりあえず、もう一度玄関ロビーに戻ってみるか」

もしかしたら、ほかの新生生が集まっているかもしれない。
オレは駆け足でそこに向かった。

不気味な廊下を走り抜け、オレは玄関ホールに辿り着くことが出来た。

オレが玄関ホールに戻るとそこには……

……彼らの姿があった。

???

「あれ? …お前もここの新生生なのか?」

神堂春樹

「えっ? あ、ああそうだけど……じゃあ、お前らも!」

???

「うん！この希望ヶ峰学園に入学する予定の新生だよ！」

???

「これで15人か・・・キリエえし、皆そろったんとちゃう？」

玄関ホールに集まった・・・

オレを含めた15人・・・

そう、つまり彼らが・・・

希望ヶ峰学園に選ばれた“超高校級”の生徒達・・・。

T
o
b
e
c

o
n
t
i
n
u
e
d
...

よつこそぜツボウガクエン その1(後書き)

次回・・・いよいよ残り14人の生徒登場です!!!

ようこそゼツボウガクエン その2 (前書き)

自己紹介編。パート1です。

ようこそゼツボウガクエン その2

この場にいる全員が“超高校級”の生徒達……。

何だろう、独特の雰囲気っつかオーラっていつか……

うん、ここにいるだけで押し潰されそうだ。オレ、帰っていいかな。

……(泣)

まあ、とりあえず挨拶だ。

神堂春樹

「えーっと、神堂春樹っていいます。ちょっと教室の方で寝ちまつてて遅れたんだ」

???

「えっ!?!君もなの……?」

???

「そうになると、ますます妙だわ……」

???

「どうなってんだ?一体?」

突然の周りの反応にオレは疑問を抱いた。

神堂春樹

「ちよっ……すまん!じよ、状況が読めねえんだけど……!」

???

「あ、ああ！せや！まずは今ここに来た新入生君のためにも、改めて自己紹介から始めへんか！？」

????

「そうね。その方がいいわ」

????

「ああん？こんな状況で、んな事してられるか」

????

「けど、相手をどう呼んでいいか分からないと話し合いも出来ないぞ？」

????

「・・・チツ、かったりーな」

????

「んじゃ、自己紹介から始めて話し合いはその後って事にするか」

なんか自己紹介をする雰囲気となってきた。みんなの事はネットとかであらかじめ調べてあるけど、この際だ。交流を深めておう。

よし、まずはあそこにいる五人に話しかけてみよう。

最初に右手首に青色のリストバンドを付けた髪がやや短めで金髪の人に声を掛けた。

東城龍介

「おう、オレの名前は東城龍介。ま、よろしくたのむわ」

『超高校級のサッカー選手』 トウジヨウ リユウスケ

東城龍介っていえば・・・、巧みなボール裁きに強力なシュート力を兼ねそろえた有名な高校生サッカー選手だ。彼にボールが渡れば、ゴールはほぼ決まったも同然と言われる程であり、すでにプロからスカウトの息がかかっているらしい。

東城龍介

「にしても、なんなんだここはよお・・・」

神堂春樹

「ああ・・・確かにな」

東城龍介

「ま、あんまり深く考えるのはやめておくか・・・。気楽にいこーぜ」

神堂春樹

「おいおい。お気楽すぎだろ・・・」

東城龍介

「オレはお気楽主義なんだよ。人生気楽に生きてかねーと体が持たないぜ」

神堂春樹

「そんなもんかね」

でも、一理あるかもしれん。

東城龍介

「よし、そんな訳だからオレは寝る。自己紹介終わったら起こして」

神堂春樹

「いや、寝るな!!」

東城龍介

「んなこと言われてもオレは一日12時間寝ないと調子出ねーんだよ、マジで」

どんな体質しているんだよ……。お気楽にも程がある……。

次にブレザーを腰に巻いたポニーテールが特徴的な人に話しかけた。

松川尚子

「私は松川尚子。よろしくな!」

『超高校級の歌手』 マツカワ ナオコ

松川尚子……。聴く者すべてを魅了する歌声を持ち、オリコンチャートでは常に一位をキープしている超高校級の歌手だ。

彼女の歌はオレも聴いており、彼女のCDを買おうにも大概即日完売で手に入れるのに苦労した思い出がある。

愛嬌たっぷりなキャラを売りとしており、男性はもちろん女性からも圧倒的人気を誇る音楽界の超新星である。

はずなんだけど……

松川尚子

「くあくっ。にしても暇だな。つか、腹減った」

テレビで見る姿とは違う……。あんまり……。いや、かなり女の子らしさというのを感じない。
なんかちよつと幻滅……。

松川尚子

「ん〜？今、お前失礼なこと考えなかったか？女の子っぽくないとか」

神堂春樹

「えっ！？い、いや別に……」

松川尚子

「……ま、いいけどな。そういう風に見られてるの慣れてるし」

神堂春樹

「あ……す、すまん！」

松川尚子

「ああ、気にすんなよ。ああいう世界じゃあんなキャラじゃないとやっていけねーからさ。プロデューサーとかも女の子らしくしろだのやったら煩いし、やってられるかっての。こっちはただ歌えればそれでいいのにさ」

神堂春樹

「そ、そうなのか？」

松川尚子

「そーそー、そうなんだよ。．．．あー、あのさ何か食うもん持っ
てない？」

神堂春樹

「いや．．．持っていない」

こんな姿をファンが知ったらどうなるんだろう．．．。

今度は長身で茶髪のオールバックが特徴的な人に話しかけた。さっ
き自己紹介を提案した奴だな。

川島敦士

「オレの名前は川島敦士！泣く子も笑うお笑い芸人とはオレのこと
や！」

『超高校級のお笑い芸人』 カワシマ アツシ

川島敦士．．．。お笑い界に新たな旋風を巻き起こし、中学二年生
の時には某お笑い芸人大会で優勝を果たしたという高校生お笑い芸
人だ。

ボケやツッコミはもちろんリアクション芸やトークも難なくこなし、
テレビ上で彼を見ない日なんてないくらいである。

さっきの松川尚子はテレビとはキャラが全く違ったけど．．．

川島敦士

「なんやどないしたんや、シケた顔して。もっと笑ってこつや笑って！」

こいつはそのまんまだ。

川島敦士

「なあ、ちよつとええか？」

神堂春樹

「ん？何だよ？」

川島敦士

「人が一番幸せな時ってどんな時やと思う？」

神堂春樹

「えっ……？うん……何だろうな」

あんまり考えたことも無かった。

川島敦士

「あんな、こういう時はボケでもスベっても何でもええけん答えるもんやで？これ、お笑い芸人の常識や」

オレ、お笑い芸人じゃないんですけど……

川島敦士

「まあええわ。答えはな、笑ってる時や！笑っていれば不幸なことも全部、幸福になる！オレは少なくともそう思ってる！」

神堂春樹

「ああ、なるほどな。分かる気がする」

川島敦士

「そやる、そやる！あんさん話分かるなあ！ま、これからよろしゆうな！」

なんて明るい奴だろう。それに話してるだけでとても楽しく思えた。

次に声を掛けたのは左腕に腕章を付けた清楚なオーラを放っている黒髪でロングヘアの人だ。

寺崎千里

「私の名前は寺崎千里。これからお互いに頑張っていきましょう」

『超高校級の生徒会長』 テラサキ チサト

寺崎千里っていえば、有名進学校で常にトップの成績をとり続け、素行も申し分なく、学校行事にも常に積極的に貢献してきたという超高校級の生徒会長……。他の生徒からの人望もとても厚く、希望ヶ峰学園で最も期待されていると言われている人物らしい。

寺崎千里

「えっと、あなたの名前は神堂春樹君……だったわよね」

神堂春樹

「え、あ、ああ」

寺崎千里

「じゃあ・・・、春樹君ね。私のことは千里って呼んでくれて構わないわ」

神堂春樹

「ええ！？いや、そんな・・・」

というか、超高校級の生徒会長と呼ばれるような人をいきなり下の名前で呼ぶのはちょっと気が引ける。

寺崎千里

「生徒同士互いに親しく交流するには、まず下の名前で呼び合って距離を縮めていくことだと思っの。それから、学校生活を通してさらに縮めていくの」

神堂春樹

「な、なるほど・・・」

生徒会長っていつからてつきり風紀などにうるさくめんどくさそうな人かと思っただけど・・・とてもフレンドリーだ。

寺崎千里

「私は生徒同士の交流関係が一番学校生活において必要だと考えるわ。この希望ヶ峰学園でもそれを大事にして学園のために貢献していくつもりよー！」

結構熱血なところもあるんだな・・・。

次に身長がオレと同じくらいで髪型が天然パーマの人に話しかけた。

宮下彰

「オレは宮下彰ってんだ。よろしくな」

『超高校級の発明家』 ミヤシタ アキラ

誰も見たことがないような発明品を次々と作り出してきたという超高校級の発明家……。

最近では地球環境に関した発明品を作り出し、何種類かの絶滅動物の危機を救ったことがあるとも言われている。

宮下彰

「なあなあ。後でよ、地球環境問題についてちょっと語らないか？」

神堂春樹

「地球環境問題？」

宮下彰

「おうよ。最近の地球は本当にいろんな意味でヤバいと思うんだ。だから、お前の意見をちょっと聞きたいな」

神堂春樹

「そんなこと言われてもなあ……」

宮下彰

「あのかなあ……オレ達人間は今地球があつてこそ生きられるんだぜ？その地球を大事にしなくてどうするよ」

今すんごい良いこと聞いた気がする。

宮下彰

「次は地球温暖化を失くせるような何かを作りたいんだけど・・・
なんかいい案あるか？」

幾らなんでも規模がでか過ぎやしないだろうか・・・。
でもこいつならやりかねないかもしれない。

ようこそゼツボウガクエン その2（後書き）

全員書くと長くなりそうなので、とりあえず五人です。原作と比べるとあまりキャラが濃くないですがそこは大目に見てください。

自己紹介は次話に続きます。

ようこそゼツボウガクエン その3 (前書き)

自己紹介編パート2です。

よつこそぜツボウガクエン その3

さて、次はあの4人に話しかけよう。なんか見た感じ皆個性的なんだけど……。

オレはまず、髪が長く無精髭を生やしている人に話しかけた。

山吹隼人

「俺の名前は山吹隼人だ」

『超高校級の歌舞伎役者』 ヤマブキ ハヤト

山吹隼人つていえば……超高校級の歌舞伎役者で、彼の手にかければどんな役でも完璧にこなしてしまい、観る者すべてを物語に引き込んでしまうという歌舞伎界きつての期待の星と呼ばれている人物だ。

ぶつちやけ、歌舞伎のことなんてよく分からないが……。

にしても……、高校生という割にはかなりオッサン顔だな……。本当に高校生なのか？

山吹隼人

「あゝ、ちよつと悪い。お前さんタバコかなんか持ってないか？」

神堂春樹

「いや、無いけど……つてダメだろ！未成年がタバコ吸っちゃ……！」

……まあ、未成年には全く見えないけどな。でも言ったら怒られ

そうだから言わないでおこう。

山吹隼人

「ああ・・・実は儂、3回留年してるからもう二十歳なんだよ。歌舞伎に夢中でつい勉強することを忘れちまってな」

それでも二十歳にみえねーよ。というか、いったいどれだけ夢中になつてたんだよ。

神堂春樹

「まあ、こんな所にタバコなんて無いと思っけどな」

山吹隼人

「そうか・・・。ま、無いもんはしょうがねえか。とりあえずこんなオッサン顔でヤニ臭い奴だがよろしく」

あ、自覚はしてるのか・・・。

次に、眼鏡を掛けていて何故か白衣を羽織っている人に声を掛けた。

龍泉寺奏多

「オレの名は龍泉寺奏多だ。これからよろしく頼む」

『超高校級の医者』 リュウセンジ カナタ

あれ・・・？こいつに関しては知らないな。事前に調べた時もこいつの名前なんて出てこなかったし・・・。
ちよっと聞いてみよう。

神堂春樹

「お前は何でこの学園に来たんだけ？」

龍泉寺奏多

「ん？オレか？フッフ・・・何を隠そう、オレは超高校級の医者としてここに来たのだ！」

神堂春樹

「い、医者あ？」

医者って・・・、確か医師免許って高校生がとれるものじゃないよな？

よし、ここも思い切って聞いてみよう。

龍泉寺奏多

「おっと、みなまで言うな。どうしてオレが高校生なのに医者なんだって聞きたいんだろう？お前の顔を見ればすぐに分かる」

・・・何だろう。こいつの喋り方なんか耳につくな。

龍泉寺奏多

「オレは医者ではあるが、医者は医者でも闇医者だ」

神堂春樹

「や、闇医者！？」

。なんだそりゃ・・・、あの何たらジャック先生もびっくりだぜ・・・

神堂春樹

「やっぱり、手術とかするの？」

龍泉寺奏多

「当たり前だ。寧ろそれが本業だから」

神堂春樹

「・・・というか、犯罪じゃないのか!？」

龍泉寺奏多

「何を言う!オレの手にかかれば治せない病気など無いのだぞ!
!寧ろ人々のために貢献していると言ってもらいたいな。高校生が
手術することを明るみに出せば色々と面倒だから素性を隠している
のだ。フハハハハハ!」

神堂春樹

「そ、そうなのか・・・」

「つか、何でこの学園はこんな奴まで呼んだんだ?もう何でもあり
かよ。」

龍泉寺奏多

「・・・ん?何だその目は・・・。や、やめる・・・オレを、オレ
を・・・そんな目で見るな・・・!!!」

神堂春樹

「・・・」

ああ・・・。

何かさっきから言う事言う事が耳につくと思ったら、こいつアレだ。

厨二病ってやつだ。今時そんな奴がいるんだな……。
というか、医者が厨二病って……。

今度は、髪が紅色でウェーブのかかったロングヘアーの人に話しかけた。

早乙女麻衣

「私の名前は早乙女麻衣よ。フフツ、よろしくね」

『超高校級のグラビアアイドル』 サオトメ マイ

スタイル抜群でグラビア雑誌はもちろん、最近では週刊女性雑誌やファッション誌にも引つ張りダコな高校生グラビアアイドル……。高校生とは思えないような大人の風格を醸し出している上に、なんと92cmという驚異のバストの持ち主である！

ん？何でそんなに細かく知ってるの？そりゃあ、彼女のグラビア雑誌などはもちろん購入しており、もうホントに色々とお世話に……。ゲフンゲフン。

……。まあとにかく男なら誰しも知ってるって訳だよ、うん。

それに……。見れば見る程美人だし、今まで嗅いだことのないようないい香り。あゝ、意識飛びそう……。

早乙女麻衣

「ん？どうかしたの？」

神堂春樹

「えっ!?!い、いやあ何でも・・・!」

・・・あれ、何か顔近くないですか？

早乙女麻衣

「フフツ、これからよろしくね」

神堂春樹

「あ、ああ。こちらこそよろしくな・・・」

早乙女麻衣

「ねえ、私もあなたの事、春樹君って呼んでもいいかしら？」

・・・えっ？

神堂春樹

「・・・だ、ダメな訳ねーよ!是非ともそう呼んで下さい!」

早乙女麻衣

「そう?じゃ、よろしくね春樹君」

・・・とにかく彼女を呼んでくれた希望ヶ峰学園には心から感謝しよう。

オレにも春が来たかもしれません・・・。

次に声を掛けたのは、やたらと背の低いツインテールの人だ。

大鳥志保

「私は大鳥志保といます」

『超高校級の漫画家』 オオトリ シホ

大鳥志保っていうえば、11歳の時に書いた漫画がきっかけで小学生でありながら漫画家デビューしたという天才漫画家である。現在でも連載されている『One Dream』は彼女の代表作ともいえる漫画で、人気ナンバーワンと言われている程であり、アニメ化までされている。

少年少女達が自分たちの夢を追い求めるといっ様子を描いたその描写は、人々に勇気と希望を与え、社会現象まで起こしてしまう程であった。

そんなすごい漫画家が、まさかこんな背の低い女の子なんて……。
というかホントに小さい！
身長130cmも無いんじゃないか!?

大鳥志保

「あの、ちよつといいですか？」

神堂春樹

「えっ……。な、何だ？」

大鳥志保

「あなたは今の私の漫画……。どう思いますか？」

神堂春樹

「ど、どうって……。スツゲエ面白いぜ!? 単行本だって全巻買ってるし、あんな面白くてわくわくする漫画初めて見たって感じだな
!」

大鳥志保

「……そうですか」

。 ……え、何？その反応……。お世辞抜きで言ったんだけど……

神堂春樹

「あ、あのさ……」

大鳥志保

「あっいえ、ありがとうございます。これからよろしくお願いします」

神堂春樹

「お、おう……」

いまいちよく分からない奴だな……。

ようこそゼツボウガクエン その3(後書き)

残り5人です。龍泉寺は個人的に気に入っております。
最近忙しい・・・。

よつこそぜツボウガクエン その4(前書き)

大分遅れました。

よつこそぜツボウガクエン その4

よし、最後にあの5人に話しかけよう。

まずはショートヘアで眼鏡を掛けている人に話しかけた。

夏目薫

「私は夏目薫！これからよろしくね！」

『超高校級のゲーマー』 ナツメ カオル

夏目薫つていえば・・・、プロ級のゲームの達人と呼ばれる程の『超高校級のゲーマー』で各国で行われる様々なゲーム大会を総ナメしているという。自分が興味を示さないジャンルのゲームも難なくこなしてしまうらしい。

夏目薫

「えーつと確か、神堂春樹・・・だったっけ？」

神堂春樹

「ん、ああ。当ってるぜ」

夏目薫

「・・・なんか、神堂ってゲームに出てきそうな苗字ね！」

神堂春樹

「あー、時々言われるな。でもオレはこの苗字結構好きだけどな」

夏目薫

「うんうん、かつこいいし良い苗字だと思うわ！」

・・・とても明るい奴だな。

それにしても、ゲーマーって言うからてっきりオタクっぽい奴を想像していたんだけど・・・

夏目薫

「良いわよねえ。私もそんな苗字だったらなあ」

結構な眼鏡美人じゃねーか。

夏目薫

「ちよつと待って・・・あなたと結婚すれば神堂薫になるじゃない！ねえ、いい考えと思わない！？」

神堂春樹

「思わねーよ！後、そんな事軽々しく言うな！」

思考がかなりぶっ飛んでるけどな・・・。

さて、次の奴はグレーの髪色をしている奴なんだが・・・。

???

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

神堂春樹

「・・・・・・・・あの・・・・・・・・」

???

「……………ああ？」

神堂春樹

「いや、その……………名前……………」

???

「……………チツ……………真田恭史郎……………」

『超高校級の不良』 サナダ キョウシロウ

真田恭史郎……………。『超高校級の不良』でケンカは負け知らずと言われ、突っかかった奴は必ず病院送りにされるといふ。何処ぞの暴走族にケンカをふっかけられた時には100人相手にも関わらず、ほぼ無傷で全員半殺しにしたという伝説を持っている。ヤクザにも恐れられているというそんな不良が何故この希望ヶ峰学園に呼ばれたのかは全くの謎だ。

真田恭史郎

「ハア……………かつたりい」

とにかくこいつを敵に回すのは絶対にダメだ……………！下手すると、いや下手しなくても死ぬ……………！

お次はおかつぱで眼鏡を掛けている女の子に話しかけた。

雨宮美穂

「あっ、わ、私は……………あ、雨宮美穂といいます。よっ、よろしく

「お願いします！」

『超高校級のシステムエンジニア』 アマミヤ ミホ

雨宮美穂「ついでに、数々の革新的な情報システムやプログラミングを手掛けている『超高校級のシステムエンジニア』だ。彼女の超高密度なプログラミングによって、いくつものそういった関係の企業が救われたという。」

にしても、結構内気な子なんだな。なかなかかわいいけど。

雨宮美穂

「すつ、すいません！すいません！私なんか・・・こんな・・・」

神堂春樹

「えつ、ええ！？な、何で謝るんだよ？」

雨宮美穂

「いつ、いえ・・・私みたいな者が自己紹介だなんて・・・」

神堂春樹

「いやいや、自己紹介は大事だぜ！？そんなに謝る事ないって！」

いくらなんでも内気にも程がある。

雨宮美穂

「うう・・・」

ちょっと、変わった子だな・・・。

次にやたらとガタイのいい筋肉質の人に声を掛けた。

鬼島堅

「俺の名前は鬼島堅だ。これからよろしくな」

『超高校級の武闘家』 キジマ ケン

鬼島堅……。世界総合格闘技大会で見事チャンピオンに輝いたという『超高校級の武闘家』で500戦以上していまだ無敗だという。日々のトレーニングも全く怠っていないらしい。それにしても、彼からは他の皆とは違うただならぬオーラがあふれ出ている……。

鬼島堅

「ところで君、体は鍛えているか？」

神堂春樹

「い、いいえ……」

鬼島堅

「そうか……。なら俺の稽古の相手は無理だな。残念だ」

いやいやいや、むしろ感謝感激なんですけど……。

鬼島堅

「しかし君には素質がありそうだな。どうだ、今後俺と特訓してみないか？」

神堂春樹

「か、考えておきます・・・」

最後に髪色が藍色で不思議な雰囲気醸し出しているロングヘアの女の人に話しかけた。

御門麗

「・・・御門麗だ。よろしく・・・」

『超高校級の???』 ミカド レイ

あれ？この人もよく知らないな・・・。オレと同じ平凡な所から選ばれたのか、はたまた龍泉寺みたいに素性を隠しているのか。

神堂春樹

「なあ、どうしてお前はこの学園に来たんだ？」

御門麗

「・・・何がだ？」

神堂春樹

「いや、この学園に来たって言う事はなにか”超高校級”の才能を持つてるって事だろ？それがどんな才能なのかって・・・」

御門麗

「・・・何故教えなければだめなんだ？」

神堂春樹

「えっ？いや、ダメって訳じゃないんだけど・・・」

御門麗

「だったら・・・言う必要はないだろう？」

そう言っただけはそっぽを向いてしまった。

何も話さないなら知りようもないな・・・。

ようやく全員との自己紹介を終えることが出来た。

にしても皆超高校級の生徒だけあって個性的なメンツばかりだな・・・。

ようこそゼツボウガクエン その4（後書き）

ようやく自己紹介編終わりです。相変わらず大変遅くなり申し訳ないです。

今更過ぎるキャラクタープロフィール 男子生徒編（前書き）

この小説に登場する超高校級の生徒達のプロフィールです。

プロフィール情報は本家ダンガンロンパの通信簿に表記されている情報とほぼ一緒です。

今回は男子生徒です。イメージC.Vはアニメなどの声優さんです。勝手に考えました。ファンの方すいません。

今更過ぎるキャラクタープロフィール 男子生徒編

0001 シンドウ ハルキ

名前：神堂春樹

身長：175cm

体重：63kg

胸囲：77cm

特記：超高校級の強運

イメージCV：森田成一

『BLEACH』 黒崎一護役

『MAJOR』 佐藤寿也役

0002 トウジヨウ リユウスケ

名前：東城龍介

身長：177cm

体重：67kg

胸囲：81cm

特記：超高校級のサッカー選手

イメージCV：杉田智和

『涼宮ハルヒの憂鬱』 キョン役

『銀魂』 坂田銀時役

0003 リユウセンジ カナタ

名前：龍泉寺奏多

身長：172cm

体重：57kg

胸囲：76cm

特記：超高校級の医者

イメージCV：福山潤

『コードギアス反逆のルルーシュ』 ルルーシュ

ランペルージ役

『WORKING!』 小鳥遊宗太役

0004 ミヤシタ アキラ

名前：宮下彰

身長：175cm

体重：59kg

胸囲：74cm

特記：超高校級の発明家

イメージCV：勝杏里

『とある魔術の禁書目録』 土御門元春役

『ダンボール戦機』 仙道ダイキ役

0005 キジマ ケン

名前：鬼島堅

身長：193cm

体重：116kg

胸囲：120cm

特記：超高校級の武闘家

イメージCV：中村悠一

『デュラララ!』 門田京平役

『おおきく振りかぶって』 阿部隆也役

0006 サナダ キョウシロウ

名前：真田恭史郎

身長：177cm

体重：70kg

胸囲：78cm

特記：超高校級の不良

イメージCV：岡本信彦

『青の祓魔師』 奥村燐役

『とある魔術の禁書目録』 一方通行役

0007 カワシマ アツシ

名前：川島敦士

身長：179cm

体重：64kg

胸囲：75cm

特記：超高校級のお笑い芸人

イメージCV：小野坂昌也

『テイルズ オブ シンフォニア』 ゼロス・ワイ

ルダール役

『テニスの王子様』 桃城武役

0008 ヤマブキ ハヤト

名前：山吹隼人

身長：182cm

体重：73kg

胸囲：84cm

特記：超高校級の歌舞伎役者

イメージCV：東地宏樹

ス役

『HUNTER×HUNTER』 ジン＝フリーク

『機動戦士ガンダム00』 ラッセ・アイオン役

今更過ぎるキャラクタープロフィール 男子生徒編（後書き）

ぶっちゃけイメージC.Vは私が好きな声優さんがほとんどです。

あくまで私の脳内でのイメージなので「このキャラでこの人はないだろ・・・」という方は勝手に脳内変換して下さい。もしくは指摘して下さい。

今更すぎるキャラクタープロフィール 女子生徒編（前書き）

女子生徒編です。

今更すぎるキャラクタープロフィール 女子生徒編

0009 マツカワ ナオコ

名前：松川尚子

身長：164cm

体重：47kg

胸囲：80cm

特記：超高校級の歌手

イメージCV：坂本真綾

『機動戦士ガンダムSEED DESTINY』

ルナマリア・ホーク役

『荒川アンダーザブリッジ』 ニノ役

0010 テラサキ チサト

名前：寺崎千里

身長：168cm

体重：46kg

胸囲：82cm

特記：超高校級の生徒会長

イメージCV：伊藤静

『とある魔術の禁書目録』 神裂火織役

『ハヤテのごとく!』 桂ヒナギク役

0011 ミカド レイ

名前：御門麗

身長：167cm

体重：48kg
胸囲：84cm

特記：超高校級の????

イメージCV：白石涼子

『SKET DANCE』 鬼塚一愛役

『ハヤテのごとく!』 綾崎ハヤテ役

0012 ナツメ カオル

名前：夏目薫

身長：165cm

体重：46kg

胸囲：79cm

特記：超高校級のゲーマー

イメージCV：水樹奈々

『魔法少女リリカルなのは』 フェイト・テストアロ

ツサ役

『BLOOD-C』 更衣小夜役

0013 オオトリ シホ

名前：大鳥志保

身長：129cm

体重：28kg

胸囲：66cm

特記：超高校級の漫画家

イメージCV：花澤香菜

『デュラララ!!』 園原杏里役

『青の祓魔師』 杜山しえみ役

0014 サオトメ マイ

名前：早乙女麻衣

身長：170cm

体重：53kg

胸囲：92cm

特記：超高校級のグラビアアイドル

イメージCV：小林ゆう

『銀魂』 猿飛あやめ役

『さよなら絶望先生』 木村カエレ役

0015 アマミヤ ミホ

名前：雨宮美穂

身長：162cm

体重：49kg

胸囲：89cm

特記：超高校級のシステムエンジニア

イメージCV：藤田咲

『WORKING!』 伊波まひる役

『デユラララ!!』 聖辺ルリ役

今更すぎるキャラクタープロフィール 女子生徒編（後書き）

次回から本編再開です。

よつこそせツボウガクエン その5(前書き)

えらい遅くなりました。読んでる方はいるか分かりませんが、久々更新です。

よつこそゼツボウガクエン その5

全員の自己紹介が終わった所で寺崎さんが口を開いた。

寺崎千里

「さて、自己紹介もみんな終わったことだし、そろそろ本題に移りましょう」

川島敦士

「せやな、生徒会長さんの言つとおりや」

大鳥志保

「仲良く“はじめまして”と言っている場合でもありません」

神堂春樹

「そういえば・・・みんなさっき状況がどうか言ってたな。いたい、どつという事なんだ？」

松川尚子

「えっと、神堂さあ・・・さっき教室で寝てて遅れたって言ったよな？」

神堂春樹

「え・・・あ、ああ」

宮下彰

「その件に関しては、オレ達も一緒・・・つまり全員この校内で眠っていたんだよ」

神堂春樹

「なっ・・・ホントか!？」

山吹隼人

「玄関ホールに入った途端、いきなり気を失っていてなあ・・・ちなみに僕は廊下で眠っていた」

早乙女麻衣

「私は視聴覚室だったわね」

東城龍介

「オレは購買みたいなトコだったな」

川島敦士

「とまあ、こんな感じじゃな・・・」

神堂春樹

「で、でもそれっておかしくないか!？」

龍泉寺奏多

「そう、おかしいのだよ!それにおかしい所は他にもあるぞ。皆も見ただろう、教室や廊下の窓に打ち付けられている鉄板を!」

鬼島堅

「それに・・・この妙な鉄の塊はいったい何なんだ？」

夏目薫

「確かに、私が入ってきた時はこんなのがなかったわね」

鬼島が言っている鉄の塊・・・玄関ホールの入り口を塞いでいる、

まるで銀行の巨大金庫の開け口のようなものがそこにはあった。確かに俺がここに入る時にもこんなものはなかった。それに天井から下がっている監視カメラや機関銃のようなものまである。

早乙女麻衣

「後、私の荷物が無いのよね。ケータイも何処かいつっちゃったし」

雨宮美穂

「そういえば、私のパソコンが見当たりません・・・」

龍泉寺奏多

「オレの医療道具もなくなっていた・・・オレとした事がなんという失態だ！」

宮下彰

「オレもせっかく設計図を記したメモ帳がないんだよな・・・後ケータイも」

寺崎千里

「みんな大事なものや通信手段をとれるものを奪われているよね」

確かに俺も携帯電話が見当たらない・・・クソっ、これじゃ連絡出来ないじゃねえか！

夏目薫

「もしかして・・・私たち何か犯罪チックな事に巻き込まれたんじや・・・！」

東城龍介

「バカ言ってるじゃねーよ。希望ヶ峰学園に誘拐されましたーとか、

そんなオチか？」

夏目薫

「で、でも……」

東城龍介

「そんなシケた面してんじゃねーよ。どうせあれだろ？この学園のドッキリ企画かなんかだろ」

松川尚子

「だよなー、こんな大勢が一度に誘拐されるわけないよなー」

東城龍介

「そう言う事だ。そんな訳でオレは寝る」

川島敦士

「あんさんはそればっかりやな」

東城の気の緩みにみんな少し安堵したのか再び私語が立ち始めた。

そんな時だった。

突然に“それ”は始まりをむかえた・・・。

よつこそせツボウガクエン その5(後書き)

短いです。がキリがいいのでここできります。

よつこそゼツボウガクエン その6

キーン、コーン・・・カーン、コーン・・・

一同

「・・・!？」

突然、聴きなれた学校のチャイム音が鳴り響いた。その瞬間、玄関ホールの隅にある大型の薄型テレビに電源が入った。

鬼島堅

「一体何だ!？」

寺崎千里

「どうして急に・・・!」

その時だった。

????

『あー、あー・・・!マイクテスト、マイクテスト!校内放送、校内放送・・・!大丈夫聞こえてるよね?えーっ、ではでは・・・。』

????

『えー、新入生の皆さん・・・今から入学式を執り行いたいと思いますので、至急、体育館までお集まりください。・・・ってこと

でヨロシク!』

.....

夏目薫

「な、何・・・今の？」

校内放送で聞こえてきたのは、それはもう場違いな能天気である
い声・・・。

それ故に、俺はものすごい不快感を感じた。
まるで事故現場で狂喜する人に出くわし、耳を塞ぎたくなるような
不快感・・・。

真田恭史郎

「オレは先に行かせてもらうぜ・・・」

川島敦士

「ちよ、ちよお待てえ！何、先に行つてんねん！」

真田恭史郎

「こんなくだらねえ事した奴らをぶつ殺す・・・！」

川島敦士

「怖っ！」

そついいながら真田は先に行つてしまった。

川島敦士

「やれやれ、皆どつすんねん……」

東城龍介

「やつぱりな、こりゃ催し物の一部だな。んじゃ、オレも行くつもりですかねえ」

松川尚子

「っーかりアルすぎて笑えないっーの」

東城と松川も玄関ホールを後にした。

早乙女麻衣

「ちよつと待って、私も行くわ」

大鳥志保

「私も行きます」

山吹隼人

「ったく、面倒えなあ……」

龍泉寺奏多

「では、オレも行かせてもらおうとしよう。オレをコケにしたことを後悔させてやる……!」

フハハハハハっ！と龍泉寺も行ってしまい、次々とほかのメンバーも行ってしまった。

そろそろと体育館へ向かう面々を横目に、俺はまだその場から動けずにいた。

さつきから感じた不快感が頭の中から離れなかったからだ。ただど……。それを感じたのは俺だけではなかった。

夏目薫

「本当に、大丈夫なの……？」

川島敦士

「今の校内放送にしたって、怪しすぎや……」

御門麗

「しかし、ここに残っていたとしても、危険から逃れられるわけではない……。お前達も気になっているだろう？今、自分たちの身に何が起きているのか……」

鬼島堅

「そうだな……。虎穴に入らずんば虎兇を得ずだ。何事も危険を冒さねば前に進むことは出来ない。ならば、行くしかない！」

確かにそうだよな……。

ちよつと……。いや、かなり不安だけど……。行くしかないよな！

神堂春樹

「体育館、だつたよな……」

先に行ったみんなを追いかけるように俺たちは体育館へ向かった。

川島敦士

「にしても……。やっぱり不気味やな……」

宮下彰

「ああ、それにオレ達意外には誰もいない・・・流石におかしすぎる」

東城龍介

「だから、どうせオレらを驚かせようとしてるだけだろ。この鉄板だって後で外してくれるって」

東城はそう言いながら右手で廊下の窓に打ち付けられている鉄板をコンコンと軽く叩いた。

寺崎千里

「本当にそうだといんだけど・・・」

雨宮美穂

「あの・・・体育館ってあそこですか・・・？」

御門麗

「みたいだな・・・」

どうこう話している間に体育館前についたらしい。皆一斉にぞろぞろと入っていった。

そこで俺たちを待ち受けていたのは・・・！

神堂春樹

「入学式だよな・・・どう見ても」

東城龍介

「だからオレの言った通りだろ？ “普通” の入学式じゃねーか」

と、東城が言ったその時だった。

俺たちが“普通じゃない” 光景を目の当たりにするのは・・・

????

『オーイ、全員集まったー！？それじゃあ、そろそろ始めよっか！』

どこからともなく、さっき校内放送で耳にした声が聞こえたかと思うとステージ上の教壇の上から“ソレ” は姿を現した。

雨宮美穂

「え・・・？ヌイグルミ？」

モノクマ

「ヌイグルミじゃないよ！ボクはモノクマだよっ！オマエラの、この学園の・・・学園長なのだッ！！」

・・・ここまで何かに気をとられて呆然としていたのはこれが初めてかもしれないねえ。

でも、その対象が・・・

あんな訳の分からない物体だなんて・・・！！

モノクマ

「ヨロシクねっ！」

それは場違いな程に明るくて能気な振る舞い……。何時の間にか俺の抱いていた不安は底知れない恐怖へと変わっていた。

大鳥志保

「ヌイグルミが……。喋った！」

何故か大鳥が目を輝かせて言った。

龍泉寺奏多

「お、落ち着け！ヌイグルミの中にスピーカーカーでも仕込んであるのだろう！オレの目はごまかせやしない！」

モノクマ

「だからさあ、ヌイグルミじゃなくてモノクマなんですけど！しかも、学園長なんですけど！」

山吹隼人

「うおっ！動きやがった！」

東城龍介

「だから落ち着けて……。ロボットかラジコンかなんかだろ」

宮下彰

「だとすると興味深いな。あの精密な動き……。発明家として一度調べてみたいね」

モノクマ

「しょぼーん・・・ボクをあんなガラクタなんかと一緒にしないで・・・。深く深く、マリアナ海溝まで傷つくよ・・・。ボクには、N ASAも真つ青の遠隔操作システムが搭載されて・・・って、夢をデストロイさせるような発言をさせないでほしいクマー!!」

松川尚子

「クマ・・・？ベタな口癖だな」

モノクマ

「じゃあ、時間もおしてるんでさっさと始めちゃうナリよ!」

早乙女麻衣

「キャラがブレてない・・・?」

モノクマ

「ご静粛にご静粛に、ではでは・・・」

鬼島堅

「諦めたな・・・」

モノクマ

「起立!礼!オマエラおはようございます!」

寺崎千里

「えっ、お、おはようございます!」

川島敦士

「いや、言わんでええっちゆうに」

寺崎千里

「っ、ついクセで・・・」

モノクマ

「では、これより記念すべき入学式を執り行いと思います！まず最初に、これから始まるオマエラの学園生活について一言。えー、オマエラのような才能あふれる高校生は、“世界の希望”に他なりません！そんな素晴らしい希望を保護するため、オマエラには“この学園内だけ”で共同生活を行ってもらいます！みんな、仲良く秩序を守って暮らすようにね！」

は・・・？

モノクマ

「えー、そしてですね・・・その共同生活の期限についてなんですが・・・」

モノクマは一拍溜めて・・・

モノクマ

「期限はありませんっ！つまり、一生ここで暮らしていくのです！それがオマエラに課せられた学園生活なのです！」

待てよ、今なんて言った・・・？一生、ここで暮らす・・・？

モノクマ

「あー、心配しなくても大丈夫だよ。予算は豊富だからオマエラに不自由はさせないし！」

夏目薫

「そ、そういう問題じゃないわよ!」

松川尚子

「ちよつと待てよ、ここで一生とかマジで言ってるのかよ!?!」

モノクマ

「ボクはウソつきじゃない!その自信がボクにはあるっ!あ、ついでに言っておくけど・・・外の世界とは完全にシャットアウトされてますから!だから、汚れた外の世界の心配なんて、もう必要ないからねっ!!!」

龍泉寺奏多

「何っ!?!という事は教室や廊下の窓に打ち付けられているあの鉄板は・・・!?!」

モノクマ

「そう!オマエラを閉じ込めるためのものだよ。だから、いくら叫んだって聞こえやしないよ。そういう訳で、オマエラは思う存分、この学園内だけで生活してくださいっ!!!」

東城龍介

「お、おいおいいくら何でも悪ふざけが過ぎるんじゃないか・・・?」

早乙女麻衣

「そうよ!これ以上は冗談では済まされないわよ!」

モノクマ

「さつきからウソだの、冗談だのって・・・疑り深いんだから・・・でも、それもしょうがないよね。隣人を疑わなきゃ生き抜けないご時世だもんね。まあ、ボクの言葉が本当かどうかは、後でオマエラ自身が確認してみればいいよ。そうすれば、すぐにわかるから。ボクの言葉が、純度100%の真実だって事がさ！」

雨宮美穂

「そ、そんな・・・困ります。こんな所で一生すごすなんて・・・」

モノクマ

「おやおや・・・オマエラもおかしな人たちだねえ。だって、オマエラは自ら望んで、この希望ヶ峰学園にやってきたんでしょ？それなのに、入学式の途中でもう帰りたいとか言い出すなんてさあ・・・」

神堂春樹

「それはっ・・・！こんな所だなんて思ってなかったからだ！」

モノクマ

「まあ、だけど・・・ぶつちやけた話、ない訳じゃないよ。ここから出られる方法・・・」

宮下彰

「ほ、本当か!？」

モノクマ

「学園長であるボクは、学園からどうしても出たいという人の為に“ある特別ルール”を設けたのですっ！それが『卒業』というルール!！」

大鳥志保

「卒業・・・？」

モノクマ

「では、この特別ルールについて説明していきましょう。オマエラには、学園内での“秩序”を守った共同生活が義務付けられた訳ですが・・・。もし、その“秩序”を破った者が現れた場合、その人物だけは、学園から出ていくことになるのです」

寺崎千里

「それって卒業というより退学じゃないの？」

モノクマ

「違うっ！そんな人聞きの悪いこと言わないのっ！誰がなんと言おうと『卒業』なのっ！」

御門麗

「結局、その“秩序を破る”とは・・・何をするということを意味するんだ？」

モノクマ

「うぶぶ・・・それはねえ・・・」

モノクマは、たっぷりともったいづけて・・・

先ほどと変わらない場違いな明るい口調で

こう言った……。

モノクマ

「人が人を殺すことだよ……」

神堂春樹

「こ、殺すっ!?!」

モノクマ

「殴殺刺殺撲殺斬殺焼殺圧殺絞殺銃殺封殺併殺笑殺萌殺……殺し方は問いません」

川島敦士

「ちよ待てえ!最後らへん殺し方おかしいて!」

東城龍介

「突っ込むトコそこかよ!」

モノクマ

「『誰かを殺した生徒だけがここを出られる……』それだけの単純で簡単なルールだよ。最悪の手段で最良の結果を導けるよう、せいぜい努力してください」

『誰かを殺した生徒だけがここを出られる』

その言葉を聞いた途端ゾツとした……。

背中を冷たい汗が流れ落ち、背筋が凍りついた。おそらくみんな思っているだろう。

ここは狂っている……。

モノクマ

「うぶぶ……こんな脳汁ほとばしるドキドキ感は、鮭や人間を襲う程度じゃ得られませんなあ。さっきも言ったとおり、オマエらは言わば“世界の希望”な訳だけど、そんな“希望”同士が殺し合う、“絶望”的シチュエーションなんて……ドキドキする〜！」

早乙女麻衣

「何言ってるのよ……！殺しあうってどづいづ意味よ……！」

モノクマ

「ん〜？殺し合いは殺し合いだよ？辞書ならそこに……。」

夏目薫

「意味は分かっているわよ！そうじゃなくて、どうして私たちが殺し合いなんかしなきゃいけないのよ〜！」

松川尚子

「そうだ！ふざけたことばっかり言わないでここから出せ！」

モノクマ

「……ばっかり？」

モノクマ

「ばっかりってなんだよ、ばっかりって……ばっかりなんて言い草ばっかりするなつての！」

……

モノクマ

「ホントに物分かりの悪い連中だよ。何が帰してだ。同じ事を何度も何度も何度も何度も何度も、いいかい？これからは、この学園がオマエラの家であり世界なんだよ？殺したい放題、殺して殺させるから、殺して殺して殺して殺して殺しまくっちゃえつっの！！」

何なんだよ……一体、もう訳がわからねーよ……！！

真田恭史郎

「もういい、話は十分だ……！」

一同

「!?!?」

突然、さっきまで黙っていた真田が口を開いた。

と、次の瞬間、

バンツツッ！！！！

何かが爆発したような音が体育館に鳴り響いた。

真田が足元の床を蹴り上げた音だった。

彼の体はまるで弾丸のように一直線に進んでいった。そしてモノクマの首を掴み持ち上げた。

真田狂史郎

「捕まえたぜえ……この糞クマ野郎……！このオレをこんなかつたりい事に巻き込みやがってよお……！そんなに殺して欲しけりゃテメエを殺してやるよ……！」

モノクマ

「キヤー！学園長への暴力は校則違反だよー！後ボクはモノクマだーっ！」

真田恭史郎

「うるせえ……一体テメエは何者なんだ、ああ！？」

モノクマ

「……………」

真田恭史郎

「……………あ？」

突然、モノクマは黙り始めた。

そして、ピコーン、ピコーンと妙な機械音を出し始めた。

ピコーンピコーンピコーンピコーン……

それは徐々に間隔を狭めてスピードが上がっていった。

真田恭史郎

「……………チィッ！」

御門麗

「危ない！早く投げろ！」

真田恭史郎

「分かって……………らあっ……………！」

御門が叫んだあと、真田は誰もいない壁のほうにモノクマを物凄い勢いで投げつけた。

モノクマが壁にぶつかろうとするその瞬間……………！

ドカー……………ン……………！！！！！！

神堂春樹

「ぐっ……………！！」

川島敦士

「ぬおっ……………！！」

夏目薫

「キヤーーーーーッ！！」

モノクマが爆発した……！

痛みを伴う激しい耳鳴り……
そして、むせ返る火薬の匂い……

爆発なんて、映画やテレビじゃ当たり前かもしれない。

だけど、生で本物を見たのは……

もちろん、これが初めてだった。

真田恭史郎

「……………ちっ」

御門麗

「どうした？」

真田恭史郎

「爆発ぐらいじゃ壊せねえみたいだな……この壁」

御門麗

「そうか……」

ちよっと待て今の短い間にそんな事考えてたのかよ……！

それになんでこの二人はこんなにも冷静なんだ!?

山吹隼人

「じゃ、シャレになってねーな・・・」

よつこそぜツボウガクエン その6（後書き）

今回は長文になってしまいました。やっとプロローグの部分は終了です。

ちなみに神堂と真田のイメージC/Vを入れ替えました。こっちのがシックリきたので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0961t/>

自作ダンガンロンパ小説

2011年12月29日07時48分発行